

ZOOM▶

写真劇場

旅の余韻

エッセー 須磨久善^{すまひさよし} 写真 大出一博^{おおいでかずひろ}

日本の美を愛でるには海外に出かけることも肝要だ。いつも身近にあって何でも手に入る、日本まみれの生活の中から日本の美しいものの神髄を見だして感動することは時として難しい。諸外国の中でも日本の美や文化を習熟して、しかもその対極にある独自の美を持つ都市といえば、やはりパリ。というわけで今年も私はパリに出かけた。今回の旅はクロアチアでの国際心臓外科学会での講演が主な仕事なのだけれども、直行便のない国に出入りするにはパリが一番落ち着く。

人に勧められたマレ地区のボージュ広場の近くの古いホテルに陣取って散策をはじめた。とはいえ、まずはしっかりと朝食を楽しまなくてはならない。世界中が日本食ブーム、とはいってもやはりふんわりとしたクロワッサンにたっぷりバターを塗って蜂蜜をとりーと垂らしたのを頬張る快感はここでしか味わえない。腹ごしらえが済むと、妻とモンマルトルの丘に登った。実はいまだにサクレ・クール寺院に登ったことがなかった。還暦を過ぎた今となってはもうこれが最後のチャンスと決心して、あの三百段を超える狭くて急な螺旋階段を登りきった。寺院のてっぺんからパリの街を見下ろすと、やはり日本とは趣が違ふ。この整然とした街並みは残念ながら日本よりも美しい。

街中に戻ってジョルジュサンク通りのカフェで昼食を済ませて、ギメ東洋美術館に向かった。魯山人展の最終日と友人から聞いたからだ。会場には大小とりどりの見事な器が展示され、寿司の握りの映像がテーブルの上に鮮明に映し出されていた。その周りで多くのパリジェンヌたちがごくりと喉を鳴らして見つめている。その間を縫うように着物姿の美しい日本の女性が笑顔を振りまいていた。この美術館では同時に広重展も催していた。パリの人は日本の美術がかなり好きなのだ。

帰国すると、この妖艶な美女の写真が届いていた。粋な着物姿で妖しげに見つめられると一瞬パリを忘れる。日本の美はやっぱり日本の中にあるのだな。これも日本を離れたおかげかもしれない。

